

心の扉を

開いたら

患者会・福祉団体便り

手をつなぐ育成会は、障がいのあるわが子の権利を守るために、親たちによって発足しました。しかし現在、親の高齢化により、きょうだいに支援を託すケースが増えていきます。だからこそ、幼い頃からきょうだいとの関わりを大切にしたいものです。

幼い頃から、学業や運動に秀でたきょうだいがいると、親から「お兄ちゃんのように頑張って」と期待されることがあります。親に悪気はなくても、その言葉が心に重くのしかかり、劣等感や「自分も頑張らなければ」という圧力につながる場合があります。

障がいのある子のきょうだいには、さまざまな姿があります。「弟にやさしくしてね」という親の言葉は、きょうだいの心に大きく影響し、障がいのあるきょうだいを守ろうとする気持ちが強くなる子もいれば、反対に距離を置こうとする子もいます。また、きょうだいの分まで頑張ろうとする「優等生」や、自分の感情をおさえて世話をする「思いやりのある子」、家庭を明るくするため「いつも笑顔を絶やさぬ子」がい

きょうだいにも、それぞれの人生

ます。一方で、家庭で目立たないように「自己主張を我慢する子」、そして親に怒りをぶつけ、不登校などの行動で「苦しさを表す子」などさまざまです。一人の子に複数の姿が見られたり、成長とともにタイプが変化したりすることもあります。

親が障がいのある子の支援に精いっぱいになると、知らず知らずのうちに、他のきょうだいの気持ちや願いに目を向けられなくなってしまうことも、しばしばあります。それが結果的に、成長期にあるきょうだいの、感情の変化の一因になるかもしれません。

子どもにとつての家庭とは、どんな自分でも受け入れてくれる「安全な場所」であってほしいものです。

しかし、家庭で「障がい」についての会話が避けられ、親から過剰な期待をかけられたり、年齢に不相応な責任を負わされたりすれば、その子は「自分の居場所がない」と感じてしまうかもしれません。だからこそ、障がいのある子を支えたと同時に、そのきょうだいの人生も大切に守らなければなりません。

家族の誰もが犠牲になることなく、互いに支え合える関係を築くこと。それが、家族みんなが安心して暮らしていくために必要なのではないのでしょうか。

△県手をつなぐ育成会の次回掲載は11月25日です。